

みち普請戦略会議

キーパーソンが札幌に集結しました。道路の環境保全のあり方（管理、運営、利用等）について、地域住民が参加し行政との連携による地域にふさわしい道づくりへの先進的な活動として、全国各地で展開されている「みち普請」。今回、北海道地区の事務局である（財）北海道道路管理技術センターがサポート役を務め、「みち普請」のフォーラムを開催し先導的な役割を果たしてきた地域の代表者たちによる戦略会議が、去る6月29日、約180名が参加して札幌東急ホテルで開かれました。

日時 平成14年6月29日(土)
15時00分～17時00分
会場 札幌東急ホテル
主催 北の道普請を育てる会
事務局 (財)北海道道路管理技術センター



■基調講演

道路をめぐる最近の話題について

私も道路局は、道をつくることによって地域が良くなり、暮らしが良くなり、日本全体が良くなっていくというようなインフラをつくるのが仕事です。しかし、最近東京では、「もう高速道路は十分だ」あるいは「道路整備は十分だ」というような基調で、日本イコール東京のような考え方で議論がなされているようです。地方が集まりその集積の結果として日本という国家が成り立っているわけで、石原都知事がいくら力んでも東京は一人では自立できません。

昨年9月に札幌、12月に名古屋、今年2月に福岡と日本列島を縦断した「みち普請」のフォーラムやシンポジウムを通して、非常にいい手ごたえを感じております。日本国の心ある人、志ある人が「このままで本当によいのだろうか」「もっと我々国民は原点に戻ってエンカレッジしていく必要がある」というような危機感を持って「みち普請」に参画いただいています。

テレビや新聞の世論調査、アンケート調査で、例えば高速道路はもう要らないという意見が7割出ますと、国会議員も小選挙区が影響しているのか気持ちが萎えてしまいます。したがって「みち普請」で、草の根的に公共事業は本当はみんなのものだという認識を津々浦々に浸透させて、誤った世論調査、アンケート調査がでないようにしていく。そのような流れに引っ張られないよう国民一人一人が、自分の考えをしっかりと持ち、過ちのない対応ができるような運動論にしていく必要があると思います。

組織体制でいいますと、北海道の場合は北海道道路管理技術センターが事務局です。もう少し体制を整えて、常時の活動として行う方向にあっていいと思います。できるだけ最初の段階から多くの人を巻き込む仕掛け、理念も必要で、女性も参画できる運動論が望ましいと思います。

産学官が連携を図る中で、やはり「みち普請」の原点はそれぞれの役割分担をきちんとし、連携を高めていくことが大事です。そういう意味で戦略がクリエイティブになることを期待しています。



国土交通省道路局企画課長
(現：近畿地方整備局長)

谷口 博昭

■各地からの活動報告（北海道）

道路の環境保全を通してコミュニティーの再構築を



NPO水環境北海道専務理事
荒関 岩雄



歩道の雪割りも自分達で
(札幌市/昭和36年)

わたくしは役所に入りまして35年経ちますが、当時舗装された道路もほんの僅かで、除雪も十分に行き届かない時代でした。道路の舗装工事が終わりますと町内会が祝賀パレードをやってくれたり、除雪車が来ると拍手で迎えてくれたりと、そういう時代でした。ところが今は、大雪で除雪が遅くなったりするとすさまじい苦情の電話が入ります。それが若い世代に多いというのが何ともやるせない気持ちです。少し前までは、お年寄り宅の間口や屋根の雪下ろしを地域の若い人が当たり前のようにやりました。除雪ボランティアがメディアで取り上げられ、人の心が変わりました。

恵庭市内にある茂漁川の流域の町内会はコミュニティーがしっかりして、「公共空間は地域の共有財産になる」という認識がなされ、川も道路も公園もほとんどゴミが落ちていません。茂漁川は97年の建設白書の表紙にもなったほど評判の高い整備が行われました。コミュニティーのしっかりしているところは、地域の世話役がいてみんなで気持ちよく暮らす上で必要なルールを暗黙のうちに了解しています。

観念論でコミュニティーの再構築は進みません。最も身近な公共空間である道路の環境保全のあり方を通して、一人でも多くの人に考えてもらい「北の道普請を育てる会」で話し合われるようになればいいと思います。

■各地域からの活動報告（中部）

行政と企業と住民のパートナーシップは、互いに汗をかくことから



グラウンドワーク東海会長
伊貝 星治



グラウンドワークは1980年代にイギリスで始まりました。これは住民と行政と企業の3者がパートナーシップを組み、それぞれが知恵を出し、汗をかいて地域の身近な環境、グラウンドの整備・改善を行う運動です。

グラウンドワークには三つのキーワードがあり、一つは対立からパートナーシップへ。二つ目は行政依存から住民参加型へ。三つ目が保護から地域マネジメントへです。この三つのキーワードを実現するためには四つのポイントがあります。一つは地域の環境をみんなで良くする運動。二つ目は理論だけではなくみんなで実際に汗を流す運動。三つ目は、住民、企業、行政のパートナーシップによる運動。四つ目は地域の活動を総合的にマネジメントできる専門能力を持つ中立的な組織の存在です。

東海では行政と企業と住民のパートナーシップが非常にうまく形成されつつあります。しかし、驚いたのは、行政が一緒になって汗をかき知恵を出すという点では北海道が一番。東海の各活動団体の方は、まず自分たちがお金を出して、汗をかいて、その上で行政と連携をとろうと自立型になってきました。北海道の方が自立型では先輩なので、勉強させていただきたいと思います。

■各地域からの活動報告（九州）

道が心のリボンを結び、リボーン、日本再生の鍵となる



長崎街道まちづくり推進協議会
事務局長

古賀 方子



長崎街道は、福岡、佐賀、長崎の3県を貫く228kmの道筋です。歴史景観を残す佐賀、豊かな海岸線や離島を持つ長崎と、非常に魅力ある多様な地域が連なっています。この街道は街と道という言葉で成り立っていますが、コミュニティーの再生や地域の誇りを生み出す一つのカギだということで、やっとその重要性に気づいてきたところです。

国土交通省が行っている道再生事業の第1号認定を、黒崎の駅前から放射状に広がる大きな商店街の道路網が受けました。長崎街道の北九州の一番端っこに黒崎宿という宿場があり、小倉の都心に対して黒崎の副都心という位置付けです。何とか道再生を黒崎のコミュニティーの再生につなげられないかということで、ワークショップが始められています。

道が一人一人の魂、心を結んで、あちこちで美しいリボンを結び、これがリボーン、再生という意味を込め美しい日本再生の結び目ができていこう、今日からまた一歩前へ進みたいと思います。

■戦略会議

今後どう発展させていくか

●コーディネーター

小林 英嗣

北の道普請を育てる会会長（北海道大学大学院工学研究科教授）

●参加者

森 勝彦

九州地方整備局道路部道路調査官

寺元 博昭

中部地方整備局道路部道路調査官

和田 忠幸

北海道開発局札幌開発建設部道路調査課長

谷口 博昭、荒関 岩雄、伊貝 星治、古賀 方子



森 勝彦



寺元 博昭



和田 忠幸

小林 それぞれの地域で官の立場から後方支援をされている方のお話をうかがいます。

森 わたしは3月まで鹿児島国道工事事務所の所長を務めておりました。平成13年8月の調べで、直轄国道の管理だけですが、九州で166団体がボランティア活動として清掃、植栽の管理などにたずさわり、3万人近い人が活動に参加しています。

長崎街道のほかにも日田往還、薩摩街道の白銀（しらおね）坂という歴史的な町並みがあります。電線地中化とあわせて町並みにマッチした道路整備を行い、歴史路の探訪など市民に親しまれる道づくりが行われています。

寺元 「みち普請」の活動を社会的に認知してもらうため「未知普請」のマークを作り、いろいろな活動をやっていくことが効果的だと考えます。実践の中から新しいインフラづくり、地域づくりの考え方やノウハウを蓄積していく必要があり、現在34ほどのプロジェクトを特定し、「未知普請」の考え方を具体的にプロジェクトを通して実践しています。



流雪溝へ雪を投げる住民（砂川市国道12号）

楽しさを演出しながら活動を展開していくことも大事で「未知普請」の歌をつくってみてはどうでしょう？目的を明確にし、みんなで例を決め根っこのところをしっかりと押さえた上で、次の戦略、戦術を展開していけば、全体の流れをうまく理解しながら個々の工夫が逆にまたその流れの中で生きていくと思います。

和田 北海道では雪が切り離せないの、特に除雪を通じてコミュニティを見直そうという活動を応援しています。下水道などを利用した流雪溝や融雪槽に、住民が雪を投げて町をきれいにする。自分できれいにし、安全にすることが「みち普請」なのかなと思います。行政が住民の皆さんと協働の取り組みをさせていただくという姿勢が必要。交流し発展していくことが大切です。

小林 お集まりいただいた方も含め、もう一度ご提言などをお願いします。

伊貝 グラウンドワーク協会のバッジをメンバーしか付けていません。北海道から九州までみんな同じものを付けて、点から面でやっていきたいですね。

古賀 いろいろな立場の人が長崎街道および街道のネットワークにかかわることで、日本のこれからの道が見つけられるのではないかと考えます。

荒関 地域にかかわる人は官だ、民だというのではなく、そこの地域に暮らしていることを大切にしていかないと、日本は良くなりません。

小林 たくさんのキーワードが出てきました。

谷口 「みち普請」もまた2巡目をスタートし、いい予感を抱いております。道は生活の糧であり、それを子々孫々に守り、クリエイトして残すことは我が国の歴史として必然であり、リーダーがきちっとやっていたかなければと思います。

■総括

全国展開に向けた今後の方針

これから目標を共有することが大事であり、ホームページをつくったり、本を出版するなど、お互いにやったことをほかの人にわかりやすく説明できるようにすることが非常に大事だと思います。お釈迦さんは歩く範囲でたくさんの信者をつくりました。それと似たことかもしれませんが、小さな会、小さなミーティングをたくさん重ねることもみなさんの役割の一つだと思います。



北の道普請を育てる会会長

小林 英嗣